

リコー三愛グループ会誌 ● San-ai

1976 JULY No. 80

創刊30周年記念特集 ● 三つの愛のハーモニー
“激突”座談会 ● 劇画派 vs 活字派
レポート ● 愛の手運動



ひとり残らず参加した 愛の手運動

実行委員のおにいさんサンタからプレゼントを受け取る子供たち（リコー山中荘で）



うれしい！パーティーだって

「なほみ、ほら、クリスマスパーティーだって」
お母さんの紀世美さん（リコー時計勤務）から招待カードを渡された荒川なほみちゃん（小六）は、大急ぎで読んでみた。

「たんぼは会クリスマスパーティー、目的地、山中湖畔旭ヶ丘山中荘、あなたには安すぎる会費、辛ゼロ、来ない時代からとり残されるのだ！だって。おもしろい。ねえ、行くんではよ、行こうよ！」

「この子たちに愛の手を」のよびかけで始まった昨年末の「愛の手募金」はリコー三愛グループ各社の皆さんの善意と愛情にあふれた活動によって予想をはるかに越える成果を収めた。最初の予定の倍を上回る四百五十七万三千二百七円から、遺児一人当り五万円のプレゼントが贈られた。

また贈呈式を兼ねてリコー山中荘で開かれた母と子のクリスマスパーティーも、各社の愛の手実行委員の心づくしで、型破りに楽しい集いとなった。

もつともリコー三愛グループにとって「愛の手」の活動は、けっして昨年末だけのものではない。このたびの「愛の手運動」によってグループ創業の精神である「人を愛す」は、より新しい生命力を吹き込まれたといえる。

二十数年前から㈱三愛の市村幸恵社長を中心に続けられてきた聖バレンタインデーの恵まれぬ人たちへのプレゼント、三愛石油㈱羽田支社の若者たちが創意を発揮して進めている福祉施設への奉仕活動などもその例だ。

——この子たちに愛の手を——、リコー三愛グループ社員の遺児四十五人に、みんなの善意を集めて越年のプレゼントを贈ろうという「愛の手運動」。その一環として計画された山中荘でのパーティーの知らせに、どこの家でも、まず子どもたちがとびあがって喜んだ。

さいわい十二月二十五日はすばらしい上天気。各地から集まったお母さん十九人、子どもたち三十人を乗せた大型バスは東名高速を一路西へ。同乗のリコー三愛グループ社員のお兄さん、お姉さんたちは、幼稚園の先生さながら、おべんとうは？ おやつは？ 気もちのわるくなつた子は？ と気を使いながら、お話をしたり、歌をうたったり子どもたちもすっかりなついて、膝に乗る、首に



川崎市の孤児養護施設・新日本学園で子供たちと遊ぶ三愛石油羽田支社のボランティアの皆さん。

若い善意を行動に

三愛石油羽田支社のボランティア活動

——せっかくこの世に生まれてきたのだ。やってよかったと思えることをなにかやりたい——

若いみんながばく然と抱いていたこういう気持が、三愛石油羽田支社レクリエーショングループのボランティア活動の原動力だった。

発案者の嶋原貞雄総務課長自身、入社後十年たって、なにか、もっと人間的に成長できる生き方をしたいという



各職場で手づくりの“愛の手募金箱”が作られ、みんながきそって協力。

悩みをかかえていた。そして、若い仲間たちと一緒に人生を見つめ直す気持ちで、四十八年暮、高崎市郊外の国立心身障害者施設「のぞみの園」の慰問に出かけたのだった。

翌四十九年暮の川崎市内の孤児収容施設「新日本学園」慰問には、支社内で不用品即売バザーを行なって資金を集め、おみやげを持っていつて園児たちと楽しく遊んできた。

「おじさん、来年もまた来てくれる？ 門のところまで送ってきた子どもたちにそう言われると、ああ、やってきたことはむだじゃなかったんだと実感できました」とあるメンバーは語る。

昨年の八月と十二月には、三愛会各社の応援のもとにバザーを行なったがとくに十二月のバザーは三愛ほかの積極的な応援もあって大成功、歳末には船橋市の社会福祉施設「恩寵園」を慰問した。今年六月には老人施設訪問を計画中だ。

ぶらさがる、お母さんたちは「わるいてすねえ、すみませんねえ」の連発だ。そして夕刻前、バスは新雪の富士を仰ぐ山中荘前に到着した。

先着の世話役の皆さんから「さあさあ、どうぞ」とあたたかく迎えられてロビーへ。静かな山荘はたちまち明るい活気がいっぱいになった。

なおみちゃんのお手紙から……

「この前はいろいろとありがとうございました。とても楽しかったです。富士山がとてもきれいで、すその方まではっきり見えました。ほんとうに気持ちのよいところへつれていってよかったと思っています。あの大きなおふろにはいつておよぎました。ケーキが大きくてたのしかったです」

💡どんなに心に残る思い出に……

夕食後、六時からお待ちかねのパーティーがはじまる。天井までとどきそうなクリスマスツリー、色とりどりのテープやモールで飾られたホールに子どもたちの歓声がひびく。

「愛の手」募金で集まった歳末プレゼントの贈呈式。遺児一人当り一律五万円が、三愛会竹下常務からひとりひとりに手渡された。

愛の手実行委員のお兄さん、お姉さんたちの指導で、歌に、ゲームに、フォークダンスに、みんながわれを忘れて興じている最中、正面のドアが開いて大きな声で「メリークリスマス！」

（柳リコー大森事業所の星健一君（24才）の扮するサンタクロースが、大きな袋をかついでやってきたのだ。）

子供たちの名前を順々に呼んでは、実行委員が苦心して選んだお人形やおもちゃを渡すサンタクロースを、子供たちはくいいるように見つめる。

「ねえ、あれ、ほんとのサンタのおじさん？」とお母さんにそっと聞く坊やも。

お母さんたちも、みんな童心にかえって、歌って、踊って、食べて……

子供たちはプレゼントのお人形やおもちゃをしっかりとつかえて、ごちそうを食べる間も離さない。「ねえ、こんばん、お人形といっしょに寝ていいでしょ」

「ええ、いいわよ、よかったわね」

最後にみんなで「きよし、この夜」を歌ったとき、お母さんたちも、若者たちも、みんな涙ぐんでいた。

「主人が亡くなりましてからは、クリスマスといっても二人でケーキを食べただけでしたのに、子供には、どんなに心に残る思い出の一つとなったこととてございましょう」（杉原和子さんのお便りから）

「お正月もまたたくまに過ぎましたが、昨年のクリスマスまでの一夜が、じーんと胸を熱くする思いでなつかしくよみがえってまいります。子供たちの嬉々とした姿、賑やかに楽しく過ごさせていただいた山中荘でのいろいろなまよおし、三愛会、会社の皆さま方の暖いお心づかいに感謝の気持ちでいっぱいでございます」（小島育子さんのお便りから）

💡胸をはって生きていきます

パーティーが終って九時過ぎから、十数人のお母さんが集まって懇談会が開かれた。

「私だって自殺を考えたこともありますよ。でも私より不幸な人だっていくらもある、ひとをうらやんでもなんにもならないと、胸をはって生きてくことにしたんです。おかげで子ども（敦くん・小四）ものびのび育って、先生に「母子家庭のお子さんとは見えます」って言われています。母親がジメジメしてたら、だれより子どもがかわいそ



遺児育英資金を手渡してお母さんたちと語り合う
ありし日の市村会長。



同工場検査室で完成品を
最終検査中の荒川さん。



完成部品をセット中の杉原さん。
リコー時計株式会社工場。



三愛のバレンタイン・チャリティセール。市村幸恵夫人の首頭で中尾ミエ・伊東ゆかり
園まりの皆さんも応援に。

市村前会長の善意からスタート

うですよ」と福田美佐子さん。
「でも、私、まだそんなふうには悟れなくて……」
と訴える若杉敏子さんに飯田丸子さんは、
「それがあたりまえですよ。立ち直るには時間が
いるわ。私も三カ月ぐらいいはボーッと、なん
にも手がつきませんでした。でも上の子（恵さん
・一四歳）がしっかりしてて、お父さんは遠くへ
旅行に行ってるんだと思うよ」と励ましてくれ
まして、まばらばらしつかりせな……と思ったん
です」と体験談。
「一番ほしいのは、親身になって話を聞いてくれ
る人。辛いとき、一人でクヨクヨ考えていると、
ほんのちよつとしたことでも、ものすごく大き
く見えてしまうでしょ」と神野幸子さん。
話は尽きなかった。あまり遅くなつてもと、十
一時過ぎに一応散会したが、それでも二、三人ず
つの立ち話が続いた。
「また、皆さまといろいろお話もでき、もう一度
考えなくては、もつとがんばらなくてはと一段と
勇気づけられました。ほんとうに参加できてよか
ったと思っております」（杉原和子さんのお便り
から）

昨年の「愛の手募金」の好成績には、これを企
画推進した人たちがびくつきしてしまつた。
（株）リコーほかの三十五社、五団体の職場からの募
金は、当初目標の二百万円をたちまち突破、最終
的には四百五十七万三千二百七円と、予定の倍以
上の額となった。どこの職場にも募金箱が回され
て、みんなが進んで応じた。日本リースサービ
スでは、社員の家庭によびかけて不用品のチャリ
ティ・オークションを催した。まず各家庭に直接、
実行委員名で出品協力をお願いを出したところ、

どの家でも、まず奥さんたちが大賛成、家中を探
してしまいいまわっていた道具類や衣類などが寄せ
られる。こうして集まった出品物は全社員七十人
から二百五十人以上。十一月二十一日、十二月八
日の二回にわたって行なわれた「愛のせり市」で
は、市価を無視した善意の高値がどんどんついて
思わぬ収益があがった。
そのほかの職場でも、若い実行委員の皆さんが
募金箱を持って回ると、みんなが待っていていま
したばかり募金に協力しただけでなく、締切りの後
にも、つぎつぎと追加が寄せられて、事務局では
集計発表を何度も更新しなければならなかった。
こうして集まった四百五十七万三千二百七円か
ら、四十五人の遺児たちに一人一律五万円ずつの
歳末プレゼントが贈られたのだが、まだ二百三十
二万円が残って愛の手募金として積み立てられた。
「たくさんのお金が集まったこともさることな
がら、職場の皆さん、とりわけ若い人たちの思いや
りのところが高まりをみせてくれたことに感動し
ます」と事務局では語る。
この大きなありがりの根底には、リコー三愛
グループ創業以来の愛の伝統が流れている。
三愛会の重要な事業の一つである「市村遺児育
英会」「たんぽぽ会」の歴史そのものが、これを
のがたっているのだ。
昭和三十六年一月、当時、三愛石油の庶務課長
だった佃正人さんが病死した。渋谷長泉寺で営ま
れたその葬儀に参列された市村前会長は、当時中
学三年生だった長女・正子さん、小学四年生だっ
た長男・昭夫くんのいたいけなさに胸を痛めて、
一家の柱を失った家庭に何とか救済の手をさし
のべようと提案された。
これを受けた三愛会はさっそく理事会を開き、
同年二月二日、市村遺児育英会規定の草案を練り
二月十六日、市村前会長の臨席を得た理事会で正
式に決定、三月から発効となった。
適用第一号は、上記の佃さん一家と、同じく三

へわが家の近況

保育園でてんてこ舞い

新屋美枝子さん（大阪市）

昨年は三愛会の皆さまから子どもたちのためにお心のこもったプレゼントをお寄せいただき、まことにありがとうございました。

いま私ども一家は、大阪の町のまん中にある保育園に住みこみで働いております。私の仕事は百五人の子どものちのお昼の給食づくり、園には九人の同僚の方がいますが、それでも毎日、てんてこ舞いの忙しさの中でがんばっています。

二人の息子も、今年は上が中学二年下が小学五年に進級、皆さまのおかげですくすくと成長いたしました。昨年のパーティーには仕事の都合で参加させていただけず申し訳ありませんでしたが、皆さまによりしくお伝え下さい。

洋裁教室も軌道に

酒井エミ子さん（高槻市）



ほら、こうするとうまく仕上がるでしょ…と先生ぶりも板についた酒井さん（左）

昨年は子どもたちへの多額のプレゼント、山中荘でのすばらしいパーティーなど、ほんとうにありがとうございました。

市の母子家庭貸付けを受けて自宅を改造し、去年の四月から始めた洋裁教室も丸一年。近所の奥さまやお嬢さん方十八人を生徒にどうやら軌道に乗りました。この四月からは週一回、自転車で十分ほどの場所ですぐ生徒さん六人の「分教場」もできました。

主人に先立たれたとき、まだ四カ月の赤ん坊だった末っ子の真紀ももう三つ。皆さまのお励ましのおかげでようやく、ここまでこぎつけることができました。感謝の気持ちでいっぱいでございます。

愛石油元庶務課長待遇の故・西山富士夫さんの二男・政夫くん。

佃さんの武子未亡人は、当時を回想して語る。

「第一回の育英資金を社長室で市村前会長から頂戴したのはその年の五月二十二日でございますが、その後も支給日のたびに市村前会長は姿をお見せになって、父親がいけないからといってお子さんを甘やかすと将来のためになりませんから気をつけるように」とご注意をいただいたり、なににごとによらず困ったときには、いつでも相談に来てください」と励ましてくださいました。おかげさまで正子も昭夫も無事に成人し、今は二人とも三愛石油に勤めさせていただき、あの心細かったころを思うと夢のようです」

市村前会長のポケットマネーを基金に発足した育英会の当初の規定では、三愛グループ各社の役員職員または五年以上勤続の従業員で在任中に死亡した人の遺児に、小中学校在学中は月額二千元、高校在学中は三千元を支給するというものだった。

金額はその後、小中学生五千元、高校生八千元に増額され、また、昨五十年六月からは、これまで支給対象となっていなかった未就学児童（〇歳～六歳）にも月額四千元が支給されることになった。これは、乳幼児をかかえてご主人に先立たれた場合、精神的にも物質的にも一番苦しいのだから、少しでも力になってあげたいという意見が高まってきたためだった。

館林会長は今年度の育英会授与式の日、お母さんがたを前に次のように語った。

「グループの今日あるのは、亡くなられた皆様のご主人さまの力にあずかるものが大きいと思います。困ったことがあったらなんでもご相談ください。そしてお子さまがたはきびしく、立派な人間に育ててください」

また、市村夫人は昨年十二月十六日（会長命日）に百万円を寄附されている。

励まし合う「たんぽぽ母さん」たち

昨年の四月九日、育英基金授与のため集まった首都圏在住のお母さんたちの懇親会が開かれた。

いろいろな体験談や意見交換の中から、もともと私たち自身が力を合わせていかなければという声が自然とよりあがってきた。

「おたがい共通の体験があるんですから、互に話し合い、助け合う場を作っていこうではありませんか」（福田美佐子さん）といった提案から誕生したのが「たんぽぽ会」の構想だった。

風雪に耐えて深く根を張り、太陽に向かって可憐な花を開くたんぽぽのようにたくましく生きようとの願いをこめて名づけられたこの会は、会員同士の親睦と助け合いをその役割として、四月二十五日、会には三愛会内に事務局をおき、四月二十五日、正式に発足した。

以後、たんぽぽ会のお母さんたちは、事務局を中心に連絡をとり合いながら、仕事のあつせん、暮らしや教育のさまざまな悩みなどを話し合い、励まし合ってきた。

とりわけ、新しく不幸に見舞われた若いお母さんにとっては、試練に耐え、明るく生き抜いている「先輩」の体験談と親身の慰めは、なにもまして生きる勇気を与えてくれた。一度、在京の会員だけでなく、全国の会員が集まって交流することができたなら……というお母さんたちの願いが実現したのが、あの山中湖畔のクリスマスパーティーだったのである。

本年4月におこなわれた愛の手委員会では、組織の恒久化を申しあわせており、本年暮の愛の手募金をクリスマスパーティーを共におこなうことも決定している。力づけ合い、慰め合いながら懸命に生きているお母さんたち、子どもたちを、今後もみんなで見守り励ましていこうではないか。